「グローバルCOEプログラム」（平成20年度採択拠点）事業結果報告書　　概　要

機 関 名	東京大学	機関番号	12601	拠点番号	J04
１．機関の代表者 （ 学 長 ）	（ふりがな〈ローマ字〉）HAMADA JUNICHI （氏　名）濱田　純一				
２．申請分野 （該当するものに○印）	Ｆ〈医学系〉　Ｇ〈数学、物理学、地球科学〉　Ｈ〈機械、土木、建築、その他工学〉　Ｉ〈社会科学〉　Ｊ〈学際、複合、新領域〉				
３．拠点のプログラム名称 （英訳名）	次世代型生命・医療倫理の教育研究拠点創成－学際的・国際的ネットワークの構築－ Creation of a New Interdisciplinary and International Base for Biomedical Ethics Education and Research				
研究分野及びキーワード	〈研究分野：学際、複合、新領域〉（医療倫理学）（生命倫理学）（研究倫理）（臨床倫理）（国際連携）				
４．専攻等名	医学系研究科：健康科学・看護学専攻、人文社会系研究科：倫理学、哲学、薬学系研究科：医薬政策学講座、医薬品評価学講座、教育学研究科：教育創発学コース、教育学コース、医学系研究科：医療安全管理学講座、理学研究科：広報科学コミュニケーション				
５．連携先機関名 （他の大学等と連携した取組の場合）	米国ヘイスティングス・センター、米国立衛生研究所、ペンシルヴァニア大学、ケース・ウェスタン・リザーブ大学、英国オックスフォード大学、ノルウェー王国立ベルゲン大学、豪国モナシュ大学、シンガポール国立大学				

６．事業推進担当者　　計　２７　名

※他の大学等と連携した取組の場合：拠点となる大学に所属する事業推進担当者の割合［ 70%］

ふりがな〈ローマ字〉 氏　　名	所属部局（専攻等）・職名	現在の専門 学　位	役　割　分　担 （事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項）
（拠点リーダー）			
Akabayashi, Akira 赤林　朗	大学院医学系研究科・健康科学看護学専攻・教授	医療倫理学 医学博士	拠点形成計画の総括
Ohashi, Yasuo 大橋　靖雄	大学院医学系研究科・健康科学看護学専攻・教授	生物統計学 工学博士	アウトリーチ担当、シンクタンク拠点の創成
Kawakami, Norito 川上　憲人	大学院医学系研究科・健康科学看護学専攻・教授	精神保健学 医学博士	人材養成担当、教育プログラム作成
Sanada, Hiromi 真田　弘美	大学院医学系研究科・健康科学看護学専攻・教授	老年看護学 医学博士	人材養成担当、教育プログラム作成
Sekine, Seizo 関根　清三	大学院人文社会系研究科・倫理学・教授	倫理学 文学博士	次世代型生命・医療倫理に関わる研究
Matsunaga, Sumio 松永　澄夫 （2010年3月31日交代）	大学院人文社会系研究科・哲学・教授	哲学 文学修士	次世代型生命・医療倫理に関わる研究
Tsuruoka, Yoshio 鶴岡　賀雄	大学院人文社会系研究科・宗教学宗教史学・教授	宗教学 文学博士	次世代型生命・医療倫理に関わる研究
Saito, Akira 斉藤　明	大学院人文社会系研究科・インド哲学仏教学・教授	インド哲学仏教学・文学博士	次世代型生命・医療倫理に関わる研究
Tsutani, Kiichiro 津谷　喜一郎	大学院薬学系研究科・医薬政策学講座・特任教授	医薬政策学 医学博士	臨床研究審査学の研究
Ono, Shunsuke 小野　俊介	大学院薬学系研究科・医薬品評価学講座・准教授	薬事規制 薬学博士	臨床研究審査学の研究
Arakawa, Yoshihiro 荒川　義弘	医学部附属病院・臨床試験部・准教授	医療薬学 薬学博士	臨床研究審査学の研究、人材養成担当
Suzuki, Hiroshi 鈴木　洋史	医学部附属病院・薬剤部・教授	臨床薬物動態学 薬学博士	臨床研究審査学の研究、臨床倫理コンサルテーション学の研究
Kanamori, Osamu 金森　修	大学院教育学研究科・教育創発学コース・教授	科学思想史 文学博士	次世代型生命・医療倫理に関わる研究、人材養成担当
Kawamoto, Takashi 川本　隆史	大学院教育学研究科・教育学コース・教授	社会倫理学 文学博士	次世代型生命・医療倫理に関わる研究、人材養成担当
Muto, Kaori 武藤　香織	医科学研究所、ヒトゲノム解析センター　公共政策研究分野・准教授	医療社会学 社会学修士	次世代型生命・医療倫理に関わる研究、教育プログラム作成
Yoshida, Kenichi 吉田　謙一	大学院医学系研究科・社会医学専攻・教授	法医学 医学博士	法的側面の指導、人材養成担当
Andoh, Kaoru 安藤　馨 （2009年3月31日交代）	大学院法学政治学研究科・法哲学講座・助教	法哲学 法学修士	法的側面の指導、人材養成担当
Kodama, Yasushi 児玉　安司	大学院医学系研究科・医療安全管理学講座・客員教授	医事法学 医学博士	法的側面の指導、教育プログラム作成
Maeda, Shoichi 前田　正一 （2009年3月31日交代）	大学院医学系研究科・医療安全管理学講座・客員准教授	医事法学 法学修士	法的側面の指導、教育プログラム作成
Yokoyama, Hiromi 横山　広美 （2009年4月1日追加）	大学院理学系研究科・広報科学コミュニケーション・准教授	広報科学コミュニケーション・理学博士	科学コミュニケーション関連の教育指導
Takimoto, Yoshiyuki 瀧本　禎之 （2009年4月1日追加）	大学院医学系研究科・健康科学看護学専攻・准教授	心身医学 医学博士	臨床倫理コンサルテーション学の研究
Sakakibara, Tetsuya 榊原　哲也 （2010年4月1日追加）	大学院人文社会系研究科・哲学・教授	哲学 文学博士	次世代型生命・医療倫理に関わる研究
Thomas Murray	The Hastings Center (USA), President	Bioethics, PhD	国際連携、国際会議の開催
Ezekiel Emanuel	National Institute of Health (USA), Chair	Bioethics, PhD	国際連携、国際会議の開催
Arthur Caplan	University of Pennsylvania (USA), Chair	Bioethics, PhD	国際連携、国際会議の開催
Stuart Youngner	Case Western Reserve Univ. (USA), Chair	Bioethics, MD	国際連携、国際会議の開催
Justin Oakley	Monash University (Australia), Director	Bioethics, PhD	国際連携、国際会議の開催
Tony Hope	University of Oxford (UK), Professor	Bioethics, MD	国際連携、国際会議の開催
Reidar K. Lie	University of Bergen (Norway), Professor	Bioethics, PhD	国際連携、国際会議の開催
Alastair Campbell	National University of Singapore, Director	Bioethics, ThD	国際連携、国際会議の開催

機関（連携先機関）名	東京大学,ﾍｲｽﾃｨﾝｸﾞｽ･ｾﾝﾀｰ,国立衛生研究所,ﾍﾟﾝｼﾙﾍﾞﾆｱ大学,ｹｰｽｳｪｽﾀﾝﾘｻﾞｰﾌﾞ大学,ｵｯｸｽﾌｫｰﾄﾞ大学,ﾍﾟﾙｹﾞﾝ大学,ﾓﾅｼｭ大学,ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ国立大学
拠点のプログラム名称	次世代型生命・医療倫理の教育研究拠点創成－学際的・国際的ネットワークの構築－
中核となる専攻等名	医学系研究科・健康科学・看護学専攻
事業推進担当者	（拠点リーダー）赤林　朗・教授　　外 26 名

［拠点形成の目的］

今日のグローバル化された社会では、ライフサイエンス・医療技術の発展はますます広範かつ多大な影響力を持っており、クローン技術、再生医療、脳科学、ヒトゲノム研究や、急増する海外共同治験などの国際共同研究、終末期・生殖補助医療などが生み出す**倫理的・法的・社会的諸問題**（ELSI：ethical, legal, social implications）**への対応**は、喫緊の課題である。

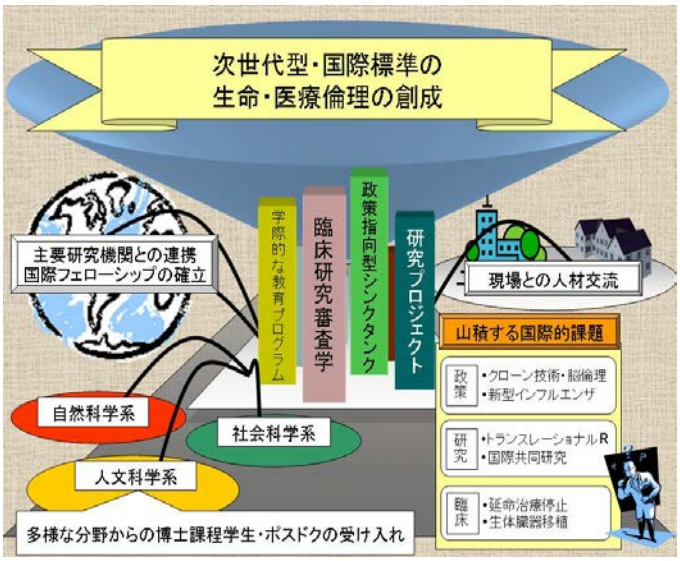
この課題に対応するには、ライフサイエンスや医療の社会的規制のためのシンクタンクとなる研究拠点と、適切な研究審査のできる倫理委員や医療現場でおきる倫理問題に対処できる人材の育成が急務である。生命・医療倫理学は、学際的な手法を通じて、ライフサイエンスや医療技術がもたらす倫理的・法的・社会的諸問題に取り組む学問であるが、わが国の生命・医療倫理は、人文系では欧米の文献を紹介する座学が中心で、医学系では実践的だが体系性に欠ける臨床倫理や研究倫理が中心であり、こうした現代的な課題に十分には応えられていない。さらに、以上のような課題に対応できる次世代の人材もほとんど輩出してこなかった。

このような現状認識を踏まえ、本教育研究拠点は、ライフサイエンス・医療技術のもたらす倫理的・法的・社会的諸問題について学際的に研究するとともに、海外の研究拠点と連携することで、質の高い国際ネットワークを形成する。そして、政策、研究および臨床という実践の場に適した教育プログラムを提供する。これらにより、国際的な場でリーダーシップを発揮して活躍できる人材を養成し、**次世代の国際標準となる生命・医療倫理の教育研究拠点を創成**する。

［拠点形成計画及び達成状況の概要］

(1)**生命･医療倫理教育研究拠点の国際ネットワーク形成**(*GABEX* : Global Alliance of Biomedical Ethics Centers**プロジェクト**)：テレビ会議システム等を利用して海外連携を活性化し、世界トップクラスの拠点から研究者を招聘して五度の国際会議を開催することで、国際的な対話を促進した。このように実質的なネットワークを形成することにより、本拠点は**生命・医療倫理におけるハブ拠点を構築**した。さらに、GABEXプロジェクトの成果を教科書ならびに論文集として刊行し、次世代型の国際標準の生命・医療倫理の創出に向けて大きく前進した。

(2)**生命・医療倫理の三領域における新展開**：研究倫理部門では、セミナーの開催、研究倫理ガイドの公表、研究倫理支援センターの設立を通じて、**研究倫理審査学**の研究・実践に取り組んだ。臨床倫理部門では、セミナーの開催、『ケースブック患者相談』の刊行により、**臨床倫理コンサルテーション学**の研究・実践に取り組んだ。公共政策部門では、新型インフルエンザのワクチン配分をめぐる政策形成過程に寄与するなど、**実態調査と政策提言に対応できるシンクタンク機能**を整備した。



(3)**生命・医療倫理教育プログラムの提供**：**基礎コース**では、全学の大学院生を対象に、**学際的な講義**を実施した。**専門コース**では、より実践的な能力を育むことを目的に、**インターシップ**、**国際セミナー**を実施した。**発展コース**では、国際的に活躍できる人材の養成を目指し、**フェローシップ**を実施した。その成果として、比較的新しい分野である生命・医療倫理学の領域で、本拠点の教育プログラムに参加した若手研究者が一定数就職するなど、**キャリアパス形成を促進**した。

(4)**アウトリーチ活動**：**リカレント教育（社会人向けの生命・医療倫理コース）**の実施、**MRの倫理教育E-learning教材**の開発、公衆衛生倫理を含む**生命・医療倫理DVD教材**の開発、一般向けの**生命・医療倫理教育用Webコンテンツ**の開発、高校生向けの教材開発や出前授業、ウェブサイトを通じた一般向けの情報発信（**ポッドキャスティング、ニュースレター**等）に取り組んだ。また、東日本大震災後は、ウェブサイトで掲示板による交流を試み、**東日本大震災に関するフォーラム**を開催するなど、喫緊の課題にも即応しつつ研究成果のアウチリーチに取り組んだ。

６－１．国際的に卓越した拠点形成としての成果

国際的に卓越した教育研究拠点の形成という観点に照らしてアピールできる成果について具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

(1)学際的・体系的な教育・研究の推進

本拠点の特長として、学際的・体系的な教育・研究を推進したことが挙げられる。もともと生命・医療倫理学が、多岐にわたるテーマに取り組む学際的な研究領域であることをふまえ、本拠点では、**研究倫理・臨床倫理コンサルテーション・公共政策の三部門**を編成し、多彩なバックグラウンドの研究者からなる共同研究チームを編成して、研究を進めてきた。**生命・医療倫理学のほぼすべてのテーマを一拠点でカバーできる体制**を整えたことは、本拠点の国際的な卓越性を示す最大の特長である。

さらに、本拠点では、研究の成果が教育にむすびつくように配慮してきた。本拠点の教育プログラム（生命・医療倫理学基礎コース）に組み込まれている**模擬倫理委員会演習**は、**受講生が模擬プロトコルを実際に審査するという世界にも類を見ない演習**である。このことが示すように、教育プログラムの学際性・体系性は、本拠点における共同研究の学際性・体系性を反映したものでもある。また、**『研究倫理セミナー』、『生命・医療倫理学入門』**などのDVD教材を開発・提供したことも、本拠点の学際的・体系的な研究の成果を教育に直結させた一例である。

(2)国際的に活躍できる人材の養成

本拠点では、国際連携のGABEXプロジェクトと連動させつつ、人材養成に取り組んできた。**教育プログラムの発展コースとして国際フェローシップを展開**し、ペンシルヴァニア大学やケース・ウェスタン・リザーブ大学等の海外連携先の大学・研究機関に、本拠点に属する大学院生やポスドクなどの若手研究者を派遣するとともに、これらの連携先に属する若手研究者を本拠点に受け入れた。国際フェローシップは、若手研究者にとって第一線の研究者と密接に交流する機会となっており、**国際的に活躍できる人材を養成する教育プログラム**として十分に機能した。このように国際連携と連動した人材育成を試みたことも、本拠点の国際的な卓越性を示している。

(3)アジアにおける生命・医療倫理の探究

本拠点のGABEXプロジェクトの成果の一つとして、**多文化圏アジアで利用可能な初の教科書**（*Biomedical Ethics in Asia: A Casebook for Multicultural Learners*）**を公刊**したことが挙げられる。従来、生命・医療倫理のケースブックは、欧米の文脈のみに依拠する傾向があったのに対して、同書は、アジア諸国のような多文化社会で利用できるようにケースを再構成した初めての試みである。これは、同プロジェクトを通じて、シンガポール国立大学などのアジア圏の研究拠点と連携してきたことの成果であり、**アジアという文脈を意識しつつ生命・医療倫理学を構築する可能性を探究**したことも、本拠点の国際的な卓越性を示す特長である。

(4)次世代の国際標準となる生命・医療倫理研究

GABEXプロジェクトの最大の成果としては、2014年に刊行予定の**論文集**(*The Future of Bioethics: International Dialogues*)が挙げられる。同書は、国際会議の単なるプロシーディングではなく、全五回の国際会議、テレビ会議、国際セミナーシリーズなど、同プロジェクトの共同研究の成果を集大成したものであり、最先端のテーマを幅広くとりあげつつ、**次世代の国際標準となる生命・医療倫理の動向を展望**する著作である。それぞれのテーマについて、第一線級の研究者が寄稿した論文と、それに対するコメントおよびリプライから構成される同書の刊行は、生命・医療倫理学分野における国際的ネットワーク拠点の形成を目的とする、GABEXプロジェクトが順調に遂行されたことを示している。

以上のように、本GCOE拠点においては、**学際的・体系的な教育・研究の推進、国際的に活躍できる人材の養成、アジアにおける生命・医療倫理の探究、次世代の国際標準となる生命・医療倫理研究**、これら四つの特長を持つ教育・研究活動を通じて、**国際的に卓越した教育・研究拠点を形成**するという当初計画を首尾よく遂行したといえる。

「グローバルＣＯＥプログラム」（平成２０年度採択拠点）事後評価結果

機 関 名	東京大学	拠点番号	J04
申請分野	学際、複合、新領域		
拠点プログラム名称	次世代型生命・医療倫理の教育研究拠点創成		
中核となる専攻等名	医学系研究科健康科学・看護学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)赤林　朗　　外　26　名		

◇グローバルＣＯＥプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は概ね達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援については、前総長のときに策定した理念を発展させた「FOREST2015」行動シナリオの中で、「自律分散協調系」・「知の構造化」の核としてグローバルCOEプログラムが位置づけられ、大学全体として重点的な取組が行われた。具体的には、総長のもとに「COEプログラム推進室」を設置し、専任の教員及び総長から指名された室員からなる体制を構築し、広報活動面において本プログラムを支援するなどの大学としての組織的な取組は評価できる。

拠点形成全体については、Global Alliance of Biomedical Ethics Centers (GABEX) プロジェクトを立ち上げ、国際会議を数回にわたって開催するなど国際的な拠点を形成したことは評価できる。教育拠点形成に関しては、基礎・専門・発展の三段階からなる教育プログラムを提供したことなど一定程度評価はできるが、国内大学間の連携を強化するような取組が十分にはなされなかったように思われる。

人材育成面については、国際連携や基礎・専門・発展の三段階からなる教育プログラムを実施することによって、人数は少ないが、若手研究者の育成がある程度達成されたと判断できる。しかし、日本の代表的大学のひとつとして国内外の他大学に波及するような人材育成にはなっていないと思われる。

研究活動面については、世界トップクラスの研究者を集めた国際学会の開催、多文化圏アジアで使用可能な教科書の刊行、国際的に著名な学術雑誌への論文発表など国際的な研究活動は評価できる。しかし、本プログラム実施期間の前半に比して後半に活動が低下している。

今後の展望については、本拠点の教育プログラムを大学院配当科目として開講することや、本拠点の研究の一部を受託研究の活用によって継続することなど、事業終了後も継続的な体制が構築されているが、さらに、他大学との連携が強化され、本拠点が生命・医療倫理教育研究の中核拠点として発展することが望まれる。

総括評価として、5 年のプログラム実施期間の前半には教育、人材育成、研究活動等で優れた成果を期待できる活発な取組が見られたが、後半で活動性が低下したように見える点は残念に思われる。ただし、全体としては設定された目的は概ね達成されたと判断できる。